

向井 香保利

学校名：神奈川県立住吉高校（神奈川県教育委員会 派遣体験研修員）担当教科：国語

1. 今回のウガンダ研修における目的やねらい

今回の研修に臨むにあたり、次にあげる2つの思いを自らの目的と意識して、視察に参加した。

これまで私が学校現場で行ってきた国際理解教育の実践といえば、例えば、諸外国の言語・音楽・スポーツ・舞踊・料理・子供の遊び、といった分野における異文化紹介が活動の中心であった。異文化を理解する、という意味では、確かにこれまでの活動も、意味のあることであり、勉強にもなったと思うが、それだけでは何か不十分な、物足りなさを感じていたことも、事実であった。単に交流にとどまるだけでなく、途上国が抱える問題や課題について、「負」といえる部分についても、もう少し、つっこんだ教育実践をしてみたい、という思いが何年もの間、ずっと心の奥底にくすぶっていた。そのためには、まず、私自身が、自分の目でしっかりと「現場」を見据えてくる必要があると、途上国の現状をしっかりと理解することが大切だと感じていた。「現場」を見て、感じて、気づいたことを、自分の言葉で発信し、伝える授業をしてみたい。それが、今回の研修に参加する動機であり、主な目的といえるものであった。

また、実際に国際社会という舞台で活躍している、青年海外協力隊員やJICA専門家と出会い、生の声を取材することによって、世界のことを考えるということが、しいては自分の人生や生き方を見つめ直す契機となることを、子供たち一人ひとりにもたらしたい、という思いがあった。

2. 目的やねらいの達成度

今回の研修では、小学校、中等学校、AIDS孤児の学校など、教育現場を多く視察させていただいた。それにより、ウガンダの教育事情について、さまざまな学びが得られたことは、大きな収穫であった。小学校の就学率は100%近いといっても、その内容については伴われていないという現状、問題点が明確になり、考えさせられた。また、環境問題については、「野生動物センター」や「マビラ森林保護区」を訪れることにより、ペットボトルや缶など「土に戻らないゴミ」の出現により、森が荒らされ、動物が生きにくくなっている現状を知り、商業経済の発展が、環境を破壊していく問題点の一端を見た思いがした。その他、水道・電気・道路事情といった、インフラの不整備、ビクトリア湖のナイルパーチという魚にまつわる搾取の問題、都市部と村落の生活格差等々、ウガンダという国が抱えている「負」の部分がかかなり浮き彫りになった。しかし、だからといって、ウガンダで暮らしている人々は、けして卑屈な暗い目をしてしているわけではなく、むしろ朗らかで、たくましく、生き生きと輝く眼差しを私たちに向けてくれたことも、また、「気づき」であった。

3. ウガンダから学んだこと

研修当初、私は途上国が抱える「貧困」のかけらを何としても探してみたいと躍起になっていた。しかし、11日間の研修を終えて見えてきたことは、「貧しさ」と同時に「ウガンダ」という国が持つ「豊かさ」も実感できたということであった。

訪問した学校の前々で、温かく、親しみを込めた笑顔で迎えてくれた子供たちの優しさは、一生忘れられない。教科書も、ノートも全員には行き渡っていない。ガラス窓も入っておらず、太陽の光だけが頼りの薄暗い教室。4人掛けの長机にひしめきあいながら、70人位の生徒がひとつの教室に押し込められている。後方の席からは、黒板の文字もはっきりとは見えない。そんな劣悪な教育環境の中で、先生の言葉をひとつも聞き漏らすまいと集中して、熱心に講義に耳を傾けるウガンダの子供たちの真摯な姿に感銘を受けた。各学校で催してくれた、歓迎セレモニーにおける歌と踊りの披露では、まるでミュージカルのショーを見ているのでは、と錯覚するほど完成された表現力に満ちていて、圧倒された。とにかくこの国の子供たちは凄い。モノはないかもしれないが、互

いに助け合い、思いやりに満ちていて、内には、底知れぬパワーと能力を持っているという印象を持った。一方豊かで、モノにあふれた生活をしているはずの、日本の若者たちは、ストレス社会の中で、いじめや人間関係に疲れ、心を病んでしまうことも多い。モノがないから、不幸でもなく、モノがあるから幸福でもない。「貧しさ」には、物質的な貧しさもあれば、精神的な貧しさもある。本当の豊かさとはいったい何なのか。真の幸福とはいったいどこにあるのか。今回の研修を通して、幸福の定義について深く考えさせられた。ウガンダにあって、日本にないものが、垣間見えた気がした。

